

誤用表現の形式と意味の相関についての考察

A Study on the Relation between Forms and Meanings about Misuse Examples

中山 英晋
Eishin NAKAYAMA

Keywords : verb “chigau”, adjectival conjugation, language change, implication called “change”

キーワード：動詞「違う」、形容詞型活用、言語変化、「変化」の意味合い

1. 動詞「違う」をとりまく状態

1. 1 形容詞型活用の「誤用」からの脱却

言語変化と呼ばれる現象は、その変化の過程における最初の時期は「誤用」と認識されることが多い。しかし、「ある表現に対して「誤用」と気づくころには、相当数の人に使われている。誤用出現を最初から見通すことは難しく、発見したときには、もはや説明がつけられないことも多い」（中山2016）。誤用が正用にいたるまでは、全体としては遅々としたスピードであろうが、出現と同時に気づくことはまずあり得ないため、誤用を問題視する人を置き去りにし、猛烈な速さで進行しているという感覚になるのが常である。つまり、注目することを怠っていた誤用表現がいつの間にか正用表現もしくは慣用表現に近づいていることがある。

動詞「違う」が「違かった」「違くて」「違くなる」等の形容詞型活用を獲得しつつある状況は、先行研究や実際の生活における感覚で容易に感じることができる。言語変化の流れの中には、「誤用」「ゆれ」「慣用」など変化の状況に応じた位置づけがあるが、この現象がどの部分に位置づけられるか拙速な判断はできない。それでも、辞書の記述では「ワ行五段活用の自動詞」、パソコンや携帯電話での漢字変換においてもスムーズにできないことから、「誤用」の域であるとの感覚を持っていた。ところが、小林（2007）の女子短大生へのアンケート調査では、被験者の89.5%が「ちがくて」を使用し、その後のインタビューでもその表現が普通だと思っていたという回答が多くを占めている現状が確認されている。その節のタイトルも「「ちがくて」はもう普通？」である。また、インターネット上の不思議な、信じられないような言葉の誤りを掲載した文献には、「違くて」「ちげーよ」「違かった」は、「一時はgoo辞書にも「新語」として載りましたが、現在ではおもに若者の一部で使われているのにとどまり、特に取り上げる気がなくなりました。」（三條 2015）とある。慣用化する前に幅広い世代での使用

が抑制され、流行語扱いでそのまま廃れていくことを示唆しているとも読み取れる内容の記述があった。誤用表現の使用者本人に誤用意識を芽生えさせることにより、社会的抑制力が働くこともあろうが、正用化に向けてそのような動きがあったこと、つまりは「違う」の形容詞型活用が定着もしくはそれを通り過ぎ下火になっていることに対して、まるで認識不足であった。未だ書き言葉ではほとんど登場せず誤用であろうと思っていたことに認識のズレを感じたため、この現象を取り上げ理解を深めていきたい。

1. 2 先行研究

この現象を論じた先行研究について概観し、またその結果「違う」の表す意味機能についてまとめて見ていくことにする。

北本（1995）は、「違う」の形容詞型活用が進行していることを確認する二種類の調査を行った。一つは語幹「違」と与えられた助詞・助動詞の間に入り得るのはどのような表現が適切かを問い、穴埋め形式で回答してもらうもの、もう一つは動詞型活用と形容詞型活用の両方を含んだ文を与え、普通か普通でないかを回答してもらう方法をとっている。その結果、活用形によって開きはあるものの、動詞型は敬遠され始め、形容詞型は勢力を伸ばしつつあるとしている。そして「違う」の持つ意味は形容詞の属性と似通っており、形容詞型活用はその形態と内容の間のギャップを埋める合理的な方策をとったことによるもの、動的属性は他の語で代替し、静的属性は「違う」を形容詞型に変化させたうえでの表現を使い、内容と形態を直結させようという動機から生じていると結論付けている。

井上（1998）は、形容詞型活用は二つのルートで普及が進んでいることを主張した。一つは年齢別調査の結果をもとに福島や北関東での使用が東京に流入したのち、全国レベルで拡大したもの、もう一つは幼児のことばの記録でも目にする機会が多いことを確認し、幼いときの覚え違いが直されずに個人的な言い誤りが広がった結果、地域のことばにまで勢力を伸ばし新しい方言として確立したものとした。「違った」は動詞の性質上、変化の瞬間を指すが、過去の継続的状态を表すにはアスペクトを示す「～ている」を用いた「違っていた」を使用する。このようにひと手間挟まなければ表現できないが、形容詞型活用「違かった」とすれば、すんなりと簡潔に表せるため便利な用法として普及が進んでいると結論付けている。この結論は動詞型活用と形容詞型活用の役割分担を示唆している。

石井（2011）は、アンケート調査により、上記先行研究当時に比べて形容詞型活用の使用状況がいっそう拡大したことを確認し、「誤用」の域を突破していることを示唆した。上記先行研究でも言及のあった「違かった」「違くて」「違くない」は被験者の過半数が許容、言及のなかった「違かろう」「違ければ」でも高い割合で許容されていることが確認された。また、動詞型活用の「違った」は完了と過去の意味を有しているのに対し、形容詞型活用の「違かった」は過去の意味だけを有していることを突き止め、井上（1998）の見解とは異なるものの、「違う」の持つ意味を動詞型活用と形容詞型活用とに役割分担を求めた結果、形容詞型活用の

普及が進行していると結論付けている。

原田（2015）は、「違う」がすでに形容詞型活用を獲得したものと、さらに新形式「ちが・ちゃ」の出現する要因を論じたものであるが、その中で「違う」の機能面に注目し、「差異」「否定」「話題維持」の三つに分類した。新形式と三分類との関係性を考察し、合理的で単純な文法規則を有するように類推が働き、形容詞化を進めたとしている。また、新形式は「さむ」「あつ」などと同等の形容詞の「語幹終止用法」であるとの指摘から、形容詞型活用の定着が進んでいることを示唆している。

これらの先行研究で参考としている「違う」の活用形態および分類を整理する。

表1：「ちがう」活用表

	語幹	未然	連用	終止／連体	假定	命令	
違う	ちが	-わない	-います -って -った	-う	-えば	×	動詞型活用
		-かろう	-かった -くて -くない -くなる	(ちげー)	-ければ	×	形容詞型活用

※北本（1995）および石井（2011）から作成。

※接続する助動詞／助詞とともに記載した。

表2：意味による動詞分類

動態動詞	意志動詞	飛ぶ 話す 食べる	など
	無意志動詞	忘れる 壊れる 開く 落ちる	など
状態動詞		ある いる わかる できる 要る	など

※鈴木（2015）から作成。

表3：アスペクト表現付与をもとにした動詞分類

	「-ている」の意味機能	動詞の例
第一種（状態動詞）	「-ている」は用いられない	ある いる 要する
第二種（継続動詞）	進行を表す	歌う 歩く 働く
第三種（瞬間動詞）	結果を表す	結婚する 死ぬ 失う
第四種の動詞	常に「-ている」が用いられる	そびえる 似る 優れる

※金田一（1950）から作成。

表4：先行研究による「違う」の意味用法分類

	森田 (1989)	『日本語基本動詞用法辞典』 (1996)	原田 (2015)
①	AとBは違う／AとBとは…が違う	二つが同じでない	差異
②	AはBと違う	物事が正しい状態にない	否定
③	Aが違う	物事が他と比べて程度が高い	話題維持

それぞれの先行研究で言及されていることの一つに、動詞「違う」は形容詞的な意味を帯びているにも関わらず、品詞は動詞であるため、内容と形態が乖離している状態に陥っているということである。この不安定な状態から安定性を求めた結果、形容詞型活用も獲得しつつあるという指摘である。確かに、品詞分けはその語の形態によって左右されるため、一般的な傾向はあるものの、決してその語が持つ意味を鑑みて決定されるわけではない。そのため、意味と品詞が合致しない例が散見されるようである。しかし、形容詞的要素を有する動詞は他にも数多く存在し、表2の状態動詞や表3の第三種動詞は形容詞的な語がよく見受けられる。にもかかわらず、「違う」だけに形容詞型活用の獲得が起こるといえるのは考えにくい。

また、言語変化は非合理性を打破するために、「音声面では発音負担をより軽減化する方向への変化が促され、文法面ではより記憶負担を軽減化する単純な規則を整える方向への変化が促される」(真田2006)のが普通であろうが、「違った」→「違かった」や「違えば」→「違ければ」、「違おう」→「違ければ」でもわかるように、明らかにモーラの数が増えており、発音負担を軽減化する方向ではなくむしろ複雑化している。

従来の方では表現しにくかった内容を表現できるように、また意味上の役割分担を求めて、形容詞型活用が出現したという指摘は一考に値する。それでも「違う」の持つ複数の意味・機能を細分化するために新しい表現形式を身につける方向に向かっているとすれば、動詞型活用も形容詞型活用も形式により使用の割合に特徴が出るはずだが、石井(2011)の調査によると、形容詞型活用の九種類の文を提示した結果、どの活用形も「許容できる」とした回答が56~100%にも上っている。これは大学生50名によるアンケート調査の結果で、被験者の年代に偏りがあるものの、非常に多くの支持を集めている実態が明らかになっている。

「使い古しのありふれた表現が目新しく独特な表現に駆逐される」(真田2006)には、旧表現を次第に忘れるという行為も含んでいるはずだが、「違う」はワ行五段活用という規則正しい活用の動詞でほかにも同様の形式を保持する動詞は多い。その形式をほかの場合でも使っている以上、忘れるというのは全く当てはまらない。「違う」は「くだけた会話から硬い文章まで幅広く使われる日常の最も基本的な和語」(『日本語語感の辞典』2010)であり、国立国語研究所コーパス開発センター構築の「現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCWJ)」および「日本語話し言葉コーパス(以下、CSJ)」により出現状況を概観しても(表5参照)、頻出レベルは最上級とは言えないが、一定のレベルで使用されている語である。意味や用法が多少変化することは考えられるが、それでも忘れるとは無縁であろう。

表5：国立国語研究所構築のコーパスによる主要動詞の抽出件数

	言う	見る	行く	書く	食べる	違う
BCCWJ	803,148	223,222	220,816	41,966	32,739	31,070
CSJ	162,186	17,678	24,962	4,292	2,417	3,006

※それぞれの終止形を語彙素として検索した。

言語変化という現象は、その語が必要に応じて転用した結果である。その語に関する何かしらの欠陥や不備を補うためには必要な働きであり、出現させないよう抑え込むのは不可能である。現象の実態を追及する姿勢を持たなければ、物事の本質が明確になることはない。単純な現象であれば分析するまでもないが、どうやら「違う」の形容詞型活用の獲得には、もう少し複雑な事情が絡んでおり、上記で述べた疑問がつきまとう。特に気になるのは、動詞型から形容詞型へ単純に変化しただけではないようなことである。そこには「違う」の持つ意味を媒介にし、形式との間に何かしらの関係性が存在しているはずである。

2. 動的属性と静的属性

2.1 「変化」の意味合い

森田(1989)によると、意味分類をする上で動詞「違う」の基本義を「ある基準となるものと合っていない。その基準を何に置くかによって「違う」の内容が分かれてくる」としている。表4の意味用法分類を見ても、この基本義に基づき派生しているのに納得できる。原田(2015)の「話題維持」のみが逸脱しているように見えるが、明確に「差異」「否定」とは認められないところからこのように命名したとも受け取れる。挙げられた例文を見ると、全体的な文脈では軽い否定のようにも感じられることから、これも含めて基本義が保持されているとみなす。言語変化は、「言語の経済性と創造性という2つの相反する方向の力がある」(真田2006)のが常だろうが、前章で述べたとおり、「違う」の形容詞型活用の獲得はこの法則にあまり則っていない。そこで気づくのが意味上の役割を二つの活用で分担することを求めた、という指摘である。基本義がはっきりしている語ではあるが、井上(1998)による例文が思い起こされる。

- (1) 化学の実験をやっている、試薬を垂らしながら、今か今かと色が変わる瞬間を待っているときなら、「あつ違った」と言ってもいい。 井上(1998)

※下線は稿者による。

この「違った」は、変化の瞬間を表すという。少々不自然に感じるため、この場合は「変わった」を使用するのが通常の方法だろうが、確かに変化を表すことに間違いはなさそうであり、上記の「ある基準となるものと合っていない」にも合致している。「違う」の基本義から派生した意味の一つとして認められそうである。以下、コーパスのBCCWJを使って「違う」が「変化」の意味として受け取れる例文を収集した。

- (2) よく嚙んで食べる、間食はしないなどを心がけるだけでも大分違ってきます。運動不足の人であれば車を使わずになるべく歩く。 『結石』(1996)
- (3) 物理の中でも分野によって答は違ってきます。そのうちで重要なのはSI単位系と呼ば

- れるものです。 『単位がわかると物理がわかる』(2002)
- (4) もっと子供っぽく可愛い感じが良かったです。ストーリーも原作と違いすぎだったし…
「Yahoo!知恵袋」(2005)
- (5) どちらが安い、出すもの、目方、量、契約の方法などで値段が違ってくるため、一概には答えられません。ただ、一般的には、定形外のほうが安いとされています。
「Yahoo!知恵袋」(2005)
- (6) 砂浜は、オイラが小さかった頃とは随分違ってきている。少しだけ切なかった。
「Yahoo!ブログ」(2008)
- ※下線は稿者による。

時間的な推移をあらわすアスペクト表現「-てくる」を伴った表現ばかりになってしまったが、「-てくる」の使用で補足も行い、「変化」の意味を帯びているのがわかる。もちろん、基本義にもっとも忠実な「差異」を表現する内容とも解釈できるが、一方で「変わる」に置き換えることも可能であろう。それでも「変化」の意味に解釈できるのは少数派であり、やはり大部分は「差異」「否定」として捉えられる。そのような大部分の「違

う」は、事物の状態や性質を捉えた静的な属性を帯びた意味であり、状態動詞としての性格を有している。対して、「変化」の意味で解釈できる「違

う」は、「変わる」「変化する」「変動する」「転じる」等の類義語と同様に、動態動詞のカテゴリーに属する(表2参照)。すなわち動詞「違

う」には、動態動詞の要素と状態動詞の要素が混在していることになる。このちぐはぐな内容を併せ持っていることに落ち着きを感じることができない。「一般に、動詞は動作・作用などものごとの動的な属性を表現する品詞、形容詞は性質・状態などものごとの静的な属性を表現する品詞」(北本1995)であるため、静的属性を帯びた状態動詞の要素が、同じような性格の形容詞の活用体系に巻き込まれ、次第に形容詞型活用を獲得する流れとなっていくと考えられる。「違

う」が有する不整合を解消するためには、合理的な方策であると位置づけられる。

静的属性を形容詞型活用に譲り、従来の動詞型活用は動的属性専用として定着する方向に向かうかと思いきや、上記で示したとおり、「変化」の意味合いでの使用は限定的である。これは、北本(1995)や石井(2011)にも指摘されているが、類義語の「変わる」「変化する」など、動作性が強くわかりやすい別の動詞によって置き換えられる例が多いことに原因があると考えられる。置き換えられているため、「違

う」が使われていたかもしれないとは到底思い浮かばず気づくはずもない。「違

う」の字形を保ちつつ、「変化」を表すには、「なる」を接続させるのがわかりやすい。この作業は動的属性を顕在化させるのに有効である。しかし、基準に則って作り出した「違

うようになる」は、落ち着きが悪い。その一つめの理由は、静的な意味として解釈されることの多い「違

う」は「なる」と共起しにくいこと、二つめの理由は、終止形に接続したことにより「定着／習慣化」を表してしまい意味合いにズレが生じていることからである。

- (7) 娘が4月から幼稚園に通うようになった。(定着／習慣化)
 (8) 大人になるにつれ、嫌いな野菜も食べられるようになります。(変化)
 (9) ?以前決定したプログラムは違うようになった。

2. 2 「遠くなる」の状況

「なる」を使用することは、変化を前面に表すのに非常にわかりやすく有用な方法である。しかし上記で述べたように、現状のままでは違和感が残る。そこで、すでに定着しつつある形容詞型活用をこの場合に当てはめて、「遠くなる」を出現させ、容易に「変化」の意味・形式を獲得していったのではないかと考えた。「違う」が持つ「変化」の意味を顕在化させるには、これで二つの方策が手に入ったことになる。一つは類義語動詞に置き換えること、もう一つは「遠くなる」の形式を採用することである。前者はもはや「違う」を使用していないため、「違う」から変換した語であるとは認識されるはずもないが、「遠くなる」はその形式に「違う」が含まれるため、すぐに形容詞型活用を遂げた形態の一種であると位置づけられるのは明確だろう。

2. 2. 1 ブログでの使用

そこで、「遠くなる」がどの程度使用されているのかを見てみたい。まだまだ誤用としての認識なのか、話し言葉の域を出ていないのか、書き言葉上ではなかなか使用状況を観察することができない。現にBCCWJや朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」などの書き言葉コーパスではわずかに数件しか抽出できない。話し言葉コーパスのCSJも学会講演や模擬講演等の独話を中心としたデータで改まり度が高いため、書き言葉的要素が強い。これも数件のみの抽出であり参考資料としては弱い。そこで思いついたことを徒然に綴るため即興性が高く、推敲を重ねることが少ないブログに注目した。ウェブ上で読むことができるので書き言葉には違いないが、話し言葉的要素が強いと判断し、用例を収集した。

- (10) SMAP中居正広ラジオ「サムガ」は来年も継続!!ただし、名称が若干遠くなる予定
 (2016年9月13日)
 (11) おばあちゃんの家 (ivyの伯母ちゃん) 行く前のサヤちゃんです (ヘア) でも…帰るとき…ちょっと遠くなりました
 (2011年10月20日)
 (12) しかしもうちょっとこう。。。何か…遠くならなかったもんかいな (苦笑)
 (2005年11月22日)
 (13) ちょっと見ない間にすべてがすごい変わってる。メールもゲームもぜんぜん遠くなっ
てるもとに戻せないかな!
 (2014年7月8日)
 (14) なんか、種類に内くんのソロ曲がなかったんで、みんなとは遠くなったけど自分で作
 ってみました…だって、内くんだけないの嫌だもん…
 (2007年8月20日)

- (15) 前に描いたガゼバンに色を塗ってみましたwwやっぱり色を塗ると印象も違くなるんだね^v^ (2010年1月15日)
- (16) 洗剤とか変えるとやっぱ香りも違くなるもんだねwwwwwwwwwwwwwwww (2010年1月15日)
- (17) 性格が変わる僕です。今日、知歌に「なんか、すごく性格違くなってね？」って言われた。 (2011年1月6日)
- (18) 岩のお墓とかありそうでないですよ！全部でいくつお墓があったのか数えてみればよかった…。けど趣旨違くなりそうですね。 (2005年6月16日)
- (19) 今日わ付き合って1年4カ月経ちました～ 時間経つのはえーわ高校違くなるけどだぶん… (2012年2月27日)

※以上2017年8月29日検索「Yahoo!ブログ」より抜粋、下線は稿者による。

「違くなる」は(10)～(19)を含めて56件が抽出できた。上記例は検索結果の最初の10例であり、文字の使い方や縮約形、顔文字を含めて気になる箇所もあるが、すべて原文のままである。どの例も「変わる」等の類義語を使用しても違和感なく使えそうであるが、「違くなる」を使用している点に何らかの意思を感じる。ブログは、言語変化の先端にあるまだ使い方がこなれていない表現でも積極的に使用される、さしずめ実験場のような場であるのだろう。このような場から新語・流行語の名称を与えられブームとなり、使用率が増え定着する変化は多々ある。そのような場だからこそ、「違くなる」の抽出件数も無視できない数にのぼってくる。若者が操るくだけた言い方が主流ではあるが、比較的年齢が上がり、丁寧な文体も見受けられることから、この表現の広がり具合が狭い範囲ではないことが推察できる。井上(1998)も「ちがくなった」の広がり方を確認するために、福島から東京にかけての年齢別調査を行っている。埼玉県や東京都では若者が使っているが、福島県や栃木県ではお年寄りも使うことから、福島県あたりで数十年前に発生し、東京に流入したのち拡散していることを突き止めている。その後、時代を経て上記のようなブログでも使用頻度が増してきているのが実態として浮かび上がった。

2. 2. 2 アンケート調査

井上(1998)の調査地は局地的であったため、全国的な広がりを見せているのかどうかアンケートで調査を行った。2017年8月25日から28日にかけて、沖縄県今帰仁村にある宿泊施設にて宿泊者およびスタッフに回答協力を依頼した。8月の沖縄は全国でも人気の旅行先であり、宿泊施設には全国各地からさまざまな旅行者が集まってくるため、言語の広がりを見るには適切だと考えた。回答者は男性20名、女性20名の合計40名であり、属性は表6のとおりである。

表6：アンケート回答者の属性 (人)

		東北	関東	中部	近畿	中四国	九州	合計
20歳代	男性	1	8		1	1	2	13
	女性	1	2		2	1	4	10
30歳代	男性		2		1	1		4
	女性		2	3		1		6
40歳代	男性			1			1	2
	女性		1	2				3
50歳代	男性		1					1
	女性						1	1
合計	男性	1	11	1	2	2	3	20
	女性	1	5	5	2	2	5	20

※出身地は小・中学校時の居住地とした。また北海道、沖縄からは回答者を得られなかった。

「違くなる」のいろいろな活用形を含んだ文を提示し、それぞれ「全く違和感なく、使用できる」ならば○、「多少違和感はあるが、許容できる」ならば△、「非常に違和感があり、奇妙だと感じる」ならば×を回答してもらい、×の場合は適切な表現への変更・記入もお願いした。その際、できる限り地域の方言は避け全国標準語を用いて考えるよう、併せて依頼した。調査に使用した文は表7のとおりである。調査文は七文のみと少ないようにも感じるが、基本的に各活用形を一文ずつ採用することで、表現によるバラつきを防止する上でこのようにした。また連用形は数種類の助動詞／助詞が接続するため、例外的に三文を採用して調整を行った。

表7：アンケート調査文

1	ここから見る景色、いつまでも違くないでほしいなあ。	未然形
2	想像していたのとは相当違くなりましたけれども、これでいかがでしょうか。	連用形1
3	レシピを参考に作ったら、ずいぶん見栄えも違くなってます。	連用形2
4	しばらくアクセスしなかったら、システム違くなったって聞いて、びっくり。	連用形3
5	アニメならいいけど、実写版だとかなり雰囲気違くなると思う。	終止形
6	私自身もっと違くなれば、楽に生きられるんじゃないかなと思います。	仮定形
7	天気予報では雨だけど、違くなれ違くなれと祈ってます。	命令形

※ブログ検索により収集した文例を参考に作成した。

回答者の判定について、年代別の状況を表8、出身地別の状況を表9にて提示する。「使用できる」と「許容できる」は態度に相違はあるものの、両者ともに使われている状況を認めており、また厳密に示しても明確な違いが表れないと判断し、合算して算出した。

全体的に高い割合で、使用が許容されていることがわかった。特に連用形は一段と高いレベルにある。活用形の中でも接続形式が多様で使われることが多いためであろうか、連用形から慣用化が進んでいると考えられる。未然形や終止形も高いレベルで認められ、これらの形式が

順調に勢力を伸ばしている姿を捉えている。仮定形と命令形に対する許容は半数以下であり、まだ誤用か慣用かゆれている状態であろう。仮定形は同義の「違くなったら」のほうが口語的で、ごだけた表現のため、話し言葉を脱却していないと思われる「違くなる」とは相容れないという判断もあったのだろう。命令形に関しては、「違う」には動詞型でも形容詞型でもそもそも命令形が存在しないため、「なる」を借りてもなかなか表現しにくいことに原因があると考えられる。使用背景が少ないこともこの結果につながっている。現状では7の「祈願」のような用例しか当てはまらないのではないだろうか。

年代別では、20～30歳代の使用状況は圧巻で、ほとんどの活用形で非常に高い割合で許容されており、慣用を突破して正用に至るのではないかといった普及状況である。40歳代では割合が少々落ち、50歳代では許容がゼロといった結果である。新表現は若い世代に支えられ、年齢を重ねても使用が続く場合に定着するという状況が裏付けられている。しかし年代別に偏りがあり、特に40～50歳代のデータは少なく、一人の意見が過大に解釈されてしまった結果かもしれないことを断っておきたい。

井上（1998）の調査により、「ちがくなった」は福島県あたりで数十年前に発生し、東京に流入したことが明らかになっているが、出身地別に見ても、やはり東北および関東の支持は高く、広く普及していることがわかる。もはや正用もしくは書き言葉化するレベルではないだろうか。中部から九州にかけては回答者数が少ないため、信頼性が低いものの、半数を超えた程度のレベルでの許容が認められる。西に行くにしたがって、割合が低くなるのは北から流入したからであろうか。多種多様なマスメディアの媒介により、言語拡散がスピーディに進むと見られる現代でも、少なからず距離が関係しているのか、それとも標準語との違いが大きい方言の特色が影響しているのであろうか。

年代を基準に見ても、出身地を基準に見ても、「違くなる」が前述の先行研究当時に比べて、ますます大きい勢力となっていることがわかった。

表8. 「使用できる」および「許容できる」(○+△)の年代別状況 (%)

	未然形	連用形1	連用形2	連用形3	終止形	仮定形	命令形	全体
20歳代	70	87	70	87	83	65	48	100 (23人)
30歳代	70	80	80	80	80	10	50	100 (10人)
40歳代	60	60	40	60	20	0	20	100 (5人)
50歳代	0	0	0	0	0	0	0	100 (2人)
合計	65	78	65	78	70	40	43	100 (40人)

表9. 「使用できる」および「許容できる」(○+△)の出身地別状況 (人)

	未然形	連用形1	連用形2	連用形3	終止形	假定形	命令形	全体
東北	1	2	1	2	2	1	1	2
関東	12	14	14	15	14	11	11	16
中部	5	5	4	5	3	0	3	6
近畿	3	4	1	4	3	2	0	4
中四国	3	3	3	3	3	1	1	4
九州	2	3	2	3	3	2	1	8
全体	25 (65%)	31 (78%)	25 (65%)	32 (78%)	28 (70%)	16 (40%)	17 (43%)	40 (100%)

※出身地別では、個別のデータ数がさらに少なくなるため、比率表示ではなく実数表示を採用した。

2. 2. 3 アンケート文修正結果の意味

「違くなる」のアンケート調査で「奇妙だと感じる」(×)と回答した人はどの活用形でも25%程度以上おり、假定形や命令形では60%ほどにのぼる。ますます大きい勢力となっていると述べたが、やはりこの表現に対して、違和感をぬぐえない人が一定数以上存在している。×の回答をした人は、自らの言語感覚を全面的に意識化して修正しているため、修正後の表現こそ明確な意味を持つとみなし注目したい。

表10. 「奇妙だと感じる」(×)の回答状況 (%)

	未然形	連用形1	連用形2	連用形3	終止形	假定形	命令形	全体
全体	35	23	35	23	30	60	58	100
	14人	9人	14人	9人	1人	24人	23人	40人

表11. アンケート文修正後の表現

未然形	変わらないで7、同じであって2、そのままであって2、そのままできて1、同じであって1、守って1
連用形1	変わりました4、違ってしまいました3、変わっています1、違っちゃいました1
連用形2	変わりました5、変わっています3、違っています2、よくなりました2、違います1、よくなっています1
連用形3	変わった5、変更になった2、変更した1、違っちゃった1
終止形	変わる6、違う5、悪くなる1
假定形	変わったら5、変われば4、違くなったら4、違ったら4、違っていたら2、変わるなら1、変えられたら1、違ければ1、よくなれば1、普通になれば1
命令形	降らないように4、降るな3、晴れるように3、晴れて3、違くなるように2、変わるように1、変わってくれ1、変わって1、違ってくれ1、降らないでくれ1、晴れてくれ1、晴れろ1、晴れー1

※数字は件数

選択されたモダリティは様々であるが、「変わる」を使った方法と「違う」を使った方法に大きく二分されており、「変わる」を選んだ人がわずかに多い結果となっている。(命令形だけは「雨」という文中の語から「晴れる」や「降る」が直感的に結びつきやすく、これらの語がほとんどを占めている。)修正前の「違くなる」を観察したら「違う」を使って修正しようという考えが自然だと思うが、それをあえて別の語に置き換えるというのはその別の語とそのときの状況が密接に結びついていることの表れである。「違う」の動詞的属性として「変化」の意味合いが表れるときがあるが、そのときは「変わる」等の類義語もしくは「違くなる」形式の使用という二つの方策があると言及したが、それは「違くなる」の普及およびそれを補完するアンケート文の修正結果からも明らかになった。

ここで再確認をするが、動詞「違う」はどのようにして「変化」の意味合いを内在させたかである。意味面で分類した表2に照らすと、動詞「違う」は状態動詞に分類されるだろう。「違う」の静的属性や形容詞的側面については、先行研究や本稿でもたびたび触れているが、状態動詞のカテゴリーに属する動詞はそもそも形容詞的用法を備えている。

(20) あの娘は母親によく似ている。

→母親によく似た／似ているあの娘

(21) 今回の事件は、先月の事件に関連している。

→先月の事件に関連した／関連している今回の事件

(20)(21)に使われている動詞が連体修飾節になった場合は、「タ」でも「テイル」でも適切な表現であることから、この場合の「タ」「テイル」はテンスやアスペクトの意味を表わさなくなる。(20)(21)のような文例が、動詞の形容詞的用法の例として金田一(1976)にも列挙されている。また、金水(1994)は「タ」の連体修飾節における文例を挙げ、形状動詞は形容詞的用法をとり、結果の状態を焦点化する働きを持っている、としている。さらに蔡(2014)は、連体修飾節内で動詞の形容詞的用法になり得る動詞が共通して持っている特徴を探る中で、「変化を含意している動詞は「変化の結果の継続」という開始段階と終了段階が欠けている状態を表わすことができることから、形容詞的用法になりやすい」と論じている。変化を焦点化する働きを簡略化して整理すると、次のようになる。

変化 → 変化の完了 → 変化後の結果の継続 → 状態

このモデルを表現できる動詞は形容詞的用法になりやすいということである。蔡(2014)は、形容詞的用法になる動詞とならない動詞を分類しているが、「違う」がどの部分に分類されるかは明確ではなく、また連体修飾節という限定的な枠組みではあるが、「変化」と動詞の形容詞的用法の関係性が示唆されている。動詞「違う」が内在している「変化」の意味は顕在

化する過程で二つの方策を獲得し、そのうちの一方は誤用と呼ばれながらも言語変化の一端として勢力を大きく伸ばし、意味の明確化が進んでいるようにも感じる。

3. 他の活用形からのアプローチ

動詞「違う」が形容詞型活用を獲得していく、その過程を「違くなる」の出現を例に論述してきたが、表1でもわかるように形容詞型活用はほかにもいくつかの形式がある。「違かった」は、井上（1998）によると「違っていた」をアスペクト表現の接続なしに簡潔に表現するために出現した形式とし、石井（2011）によると「違った」から過去を表わす意味のみが分離したために出現した形式としている。見解は違うものの、役割分担を求めた結果の獲得であることを論じた。本稿でも、役割分担を念頭に置きながら論を進める結果となった。しかし、そのほかの活用形はどのような原因があって、形容詞型活用が進行しているのだろうか。普及が先行した活用形に牽引されることで定着が促されたのであろうか。そのあたりの状況は、検証が進んでおらず明らかになっていない。他の活用形を観察することで「違う」の形容詞型活用の獲得がますます明らかになるだろうが、それは次稿としたい。

本稿アンケート調査では、被験者は40人のみで現象を見るには少ない感があるのは否めない。今後は規模を大きくした調査を実施したい。また調査文は収集したブログの例を参考にしたものではあるが、稿者が作成したものに変わりはない。実際に収集した文例ではないため、自然さに欠けたものであった可能性も否定できない。次稿では、実際の文例を採用するように努めたい。

【参考文献】

- 石井由希子（2011）「五段活用動詞「違う」の形容詞型活用」『千葉大学日本文化論叢』12 pp53-75
- 井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波新書 pp66-75
- 北本洋子（1995）「日本語動詞「違う」の形容詞型活用の実態」『横浜女子短期大学研究紀要』10 pp135-144
- 金水敏（1994）「連体修飾の「～タ」について」『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版 pp29-65
- 金田一春彦 編（1976）「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 pp7-26
- 小林千草（2007）『女ことばはどこへ消えたか？』光文社 p240
- 蔡梅花（2014）「連体修飾節の形容詞的用法と「結果継続」」『日本アジア研究』11 pp183-199
- 真田信治 編（2006）『社会言語学の展望』くろしお出版 p131-160
- 三條雅人（2015）『ネットで見かけた信じられない日本語』社会評論社 p379
- 鈴木孝明（2015）『日本語文法ファイル』くろしお出版 p77
- 中山英晋（2016）「原義とは異なる意味で使われる「誤用」例についての考察」『目白大学人文学研究』12 p224
- 森田良行（1990）『基礎日本語辞典』角川書店 pp699-700
- 原田幸一（2015）「首都圏若年層の日常会話における「違う」の使用」『社会言語化学』17-2 pp68-83
- 『日本語基本動詞用法辞典』（1989）大修館書店
- 『日本語語幹の辞典』（2010）岩波書店

（平成29年12月8日受理）